

1878 (明治11)年の7月12日、英国の女性旅行家イザベラ・バードは新潟の大里峠を越え山形に入った。この日の夕方、暗がりの中、険しい黒沢峠(小国町)に登っていった。この峠で初めて樺の木を見たときバードは旅行記に書き記した。しかし、小国の植生や峠の標高(498尺)などから考えると樺の木の可能性はゼロに近い。おそらく木肌が白い樺の木を黒沢峠は今も樺の木が多い。

翌日の13日、バードは宇津峠から米沢平野を眺望。峠を手ノ子(飯豊町)に下り、諏訪峠を越えて小松(川西町)にたどり着く。14日は小松の田園地帯を通過し赤湯に歩を進めた。この時の印象が強かったこともあってバードが米沢平野を「東洋のアルカディア(桃源郷)」と賞賛したことは周知の通りである。

賞賛の背景にあるのは米沢平野の豊かさであった。バードはこの

気炎

アルカディアのメロン

平野で実る作物を列挙する。(米、綿、とうもろこし、煙草、麻、藍、大豆、茄子、くるみ、melon きゅうり、柿...)。この中のmelonとは何であろうか。高梨健吉氏訳「日本奥地紀行」では水瓜(西瓜)、時岡敬子氏訳「日本紀行」では瓜としている。この時代米沢平野で水瓜が栽培されていたのだろうか。民俗学者宮本常一氏によれば、西瓜を仙台や盛岡の人たちが食べるようになったのは、東北本線が通ずるようになってからだという。とすればバードが見聞きしたmelonは瓜、それも私が少年時代に食んだ「まくわ瓜」ではなからうか。

大津高山形大学名誉教授はバードの旅行記を訳書で読み、生物学者として見過ごせない数々の疑問に出合った。説明するには自分で原著を全訳するしかないと考え、5年かかって2007(平成19)年に完訳を果たした。一日も早い出版を期待したい。(天見 玲)